

朝に思う (2)

津 守 真

保育における繊細の精神

四月のはじめ、私は庭に出ると、新たに入園した三才のダウンズ症のKが、砂場のへりで、ごく自然に遊びはめているのが見えた。少しはなれて、実習生が砂をいじっており、Kのことを見守っているのが分かったので、私は安心して他の子どもたちの方に向った。それからしばらくして、Kは次第にもっと大きな動きをして遊んでいた。

保育が終わってから、私は、その実習生に、そのときの様子をたずねた。実習生は次のようなことを話してくれた。

Kは、最初、動くものに興味をもっているようだった。あまりじっと見ているとわるいから、私（実習生）は少し離れたところにいた。それから、近くにあったボールをKの方にころがした。Kはそのボールを別の方向にころがしたりしていたが、そのうちに私の方に投げつけてくれるようになった。私は少し遠くの方で何かをしていると、しばらくして、Kは私の方に来るようになった。

以上は、実習生が話してくれたことであるが、私はこの話の中に、保育者の繊細な配慮があるように思った。第一に、この子どもはほんの少しだが何かを自分の手で動かしており、この実習生は、その小さな動きに価値を認め、それを見守っていた。第二に、あまりじっと見ているとわるいから、少し離れたところにいた。小さな子どもにも、一人前の人としての配慮をした。また、じっと見ていると、見る行為自体が自然でなくなるから、視線をはずした。第三に、ボールをころがし、この子どもの興味である動かすことに自分も参加した。そのうちに、子どもの方が近寄ってきて、そのあとは一緒の遊びになっていった。保育は、相手に対して人間としての敬意を払い、その場面の微妙な動きを感知し、全体に対す

る公平な判断のもとに、自らがきめてゆく行為である。

その中で、子どもも自分の感覚で世界を知り、自分の判断で行為することができるようになる。

パスカルのパンセに、「幾何学の精神と繊細の精神との違い」として次のように述べられている。

「前者においては、原理は手でさわられるように明らかであるが、しかし通常の使用からは離れている。……繊細の精神においては、原理は通常使用されており、皆の目の前にある。……ただ問題は、よい目を持つことであり……この方の原理はきわめて微妙であり、多数なので、何も見のがさないということがほとんど可能なくらいだからである。……」

(パンセ 一、前田陽一編パスカル 中央公論社 P 65 傍点筆者)

パスカルは幼児の仕事をした人ではないが、人間を育てる仕事である保育の原理の根本にふれている。

保育環境とは何か

六月のはじめ、朝、庭に出ると、すでにHが来ていた。Hはことばをもたず、緊張質で、周囲で理由がわか

らずに泣くことが多い。

この日、Hは、庭の真中をまっすぐに歩いて、前端の植えこみまでゆき、椿の木や、しんじゅ(神樹)の木の上方をながめていた。しばらくしてから、後向きに少し歩いたが、方向をかえ、前方に向い、部屋の方にしたすと歩いてもどった。

まっすぐ歩くというのは、目的意識をもって目あてに向って歩いてゆくことであり、Hがそのような行動をしたことに驚いて、私は見ていた。植えこみまでいって、木の上の方をながめているのは、何かひかれるものがあるように思えた。

数週前に、Hがいらないと思っさざがしたことがあった。そのとき、私は、この同じ場所で上の方を眺めていたHを見つけた。私は不思議に思い、一緒にそこに立って上を見ると、丈の高いしんじゅの木の葉の間から、太陽が射し入り、葉の隙間から、水玉が反射するように、光がキラキラと輝やくのが見えた。子どもと同じ位置に身を置いてみると、こちら側からは見えない光や色が視野に入ってくる。子どもは私とは違う感覚をもっているから、もっと違ったものが見えているのかもしれない

が、これだけでも、私には、Hはこの場所を選んできているのではないかと発せられた。

上を眺めることのできるときは、空間のひろがりがあったときであり、余裕のある時間をもつことのできたときである。緊張質のHにも、こういう余裕ができたことを示す行為であると思う。Hは、ある種の感情をこめて、しばらくの時間、上方を眺めた。それから、はっきりと自分で方向をかえて、部屋にもどってきた。

上をながめるとき、木の葉のみずみずしさがあり、空から光が射してくる。こういう自然環境があるときはささいわいである。しかし、ふだんはあたりまえと思ってきたこういうことが、都会ではあたりまえでなくなる時がある。これが都会の人工物に代わるとき、自然の神秘さと人間の神秘に対する感覚が損なわれてゆくのではないか。

この夏休み、この庭のすぐわきに、大工事が始まった。コンクリートの建物がこわされ、高層のビルが建つ。緑の植込みは取り払われ、それに代って、白い防護布で帳りめぐらされた。神樹の木は半分枝をとり払わ

れ、すでに実をつけていた柿の木は、棒杭になってしまった。夏の炎天のもと、上を見上げると、まばらな木の枝は、太陽を遮ぎる蔭もつからない。夏休みが終って再びが登園してくるとき、彼はまたこの樹の下にくるだろうか。

都会の只中で、子どもたちを守りつづけることがいかに困難なことか、私は、身をもって、痛感している。

この場合は、全体から見れば、まだ特殊な例かもしれない。しかし、いま、地球のあちこちで、エチオピアやネパールで、大規模の沙漠化が起っているのを見ると、保育環境から自然の恵みが失われてゆくのは、悲しいことながら、これからの世界の動向なのかもしれない。そう思っで見直すと、私共の周囲で、自然の園庭に恵まれている幼稚園、保育園、学校は、決して多くはない。

ビルの谷間で、幼児や障害児を保育することがどこまで可能だろうか。人間的な環境がどこまでこれを補いつるだろうか。しかし、どんな事態の中でも、おとなは子どもを守り育ててゆかねばならない。いま、私共は、いかにしてそれを可能にするかという、否応なしの課題の前に立たされている。

(愛育養護学校)